

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

特201 331
489 89

紙正
489 89



義忠正藏

左將下卷義殿

始



特261
489

義士忠臣藏

本藏屋印

人形ぬいひここのこ

海も我れおしむ我れ

七世の物も海も

の介あはあは



かたがひにむすぶるがふらば
五人柱の井も後を
あびしとて案内は連
束の束が村を意はつた
束の束はむすぶるがふらば

かたがひにむすぶるがふらば
束の束はむすぶるがふらば
束の束はむすぶるがふらば
束の束はむすぶるがふらば
束の束はむすぶるがふらば

桃の井の後果の
味此二子威友と違
はじき遠く後友の
病氣保養と人養の
病の病の病の病

下

幸がひんあれた
色しや今日か
彼目い後友の
分るこ又敵れも
成るたれい病ひ

のちまきぎくた城夜ありの
まきぎくのちまきぎくた
三つが威風あんなどあ
あまきぎくのちまきぎくた
まきぎくのちまきぎくた

かあろりあまきぎくた
ねまきぎくのちまきぎくた
あまきぎくのちまきぎくた
あまきぎくのちまきぎくた
あまきぎくのちまきぎくた

もつとむもあつとらんた
まなまあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし

つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし
つとむあつとらんたはし

身入してわがまを
行とある園も美人の
花の井の枝を海の時
三方蔵此慕ひ侍る
後身ゆゑ別なるとは

わがまの園も美人の
ゆゑにるるとは
美も身ゆゑ美人の
の美も身ゆゑ美人の
ゆゑにるるとは

乃平らむとてし
松風あつちり春の夜ふ
内し素ちかむら燈あゆ
かひにふんか殿のふし
くさくさ肉あひま
九

乃のむら花つらま
あのみまも物ゆは
あひくあひあひま
はのあひあひあひ
あひあひあひあひ

俊彦(俊彦)由(由)下(下)森(森)の(の)後(後)も
考(考)に(に)も(も)は(は)あ(あ)る(る)音(音)
ち(ち)さ(さ)る(る)楚(楚)あ(あ)る(る)般(般)れ(れ)の(の)
の(の)傍(傍)に(に)あ(あ)る(る)人(人)自(自)
心(心)に(に)あ(あ)る(る)上(上)か(か)ら(ら)あ(あ)る(る)

十

あ(あ)ら(ら)ま(ま)る(る)痛(痛)り(り)の(の)心(心)を(を)
あ(あ)ら(ら)ま(ま)る(る)痛(痛)り(り)の(の)心(心)を(を)
あ(あ)ら(ら)ま(ま)る(る)痛(痛)り(り)の(の)心(心)を(を)
あ(あ)ら(ら)ま(ま)る(る)痛(痛)り(り)の(の)心(心)を(を)
あ(あ)ら(ら)ま(ま)る(る)痛(痛)り(り)の(の)心(心)を(を)

あつらひのあつらひ
つらみはつらみ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ

あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ
あつらひのあつらひ

三つを養ひてゆまをぬ
まじりておぼむにわたり
じつとてぬぬ好法師に
ゆきぬるまのまきり
けききききききききき

卷ノ七 十月

まのつゆにまのつゆに
まのつゆにまのつゆに
まのつゆにまのつゆに
まのつゆにまのつゆに
まのつゆにまのつゆに

さき今例ぬつともさき
あまた初ぬぬさき
後の殺し枕田のささく
自の国の旗つて人の定せ
なすいとあらどと花付有

本下 十五

あまたさき
あまたさき
あまたさき
あまたさき
あまたさき

ゆづりそつるぬさつる者
の波柱老ふゆづり
叔と逢てふかたし
まのさきかたし
此をいふか人
人

下十六

かか舞ひるぬさ
傍多くとをり
老子の傍に梅
谷必用とあり
叔と逢てふかたし

早業の者必病よん
家老及中後及素
と人非人といふま
こかこつたはらたの
田界の地人の細

卷之十

金銀を以て師の請
病ひれ人今病ひ
士の妻は付く心
とあらん人非人
まらん

おまをきくふかたの国を
けいせいのしんがらまを
あしきしきまをまをり
まをりまをりまをり
まをりまをりまをり
まをりまをりまをり

湯のまをりまをり
まをりまをりまをり
まをりまをりまをり
まをりまをりまをり
まをりまをりまをり
まをりまをりまをり

八雲の春はげしく入ると
 身はしづかしくなる初春の
 衣はぬれぬ衣を着て
 くれなゐの枝をよみよみ
 花は深紅の花をよみよみ

し方方の花は春は
 花はあつた花はあつた
 花はあつた花はあつた
 花はあつた花はあつた
 花はあつた花はあつた
 花はあつた花はあつた

あなかなほ絶ちてあはれ
あつらひぬれぬれあはれ
あかぬれぬれあはれ
あつらひぬれぬれあはれ
あつらひぬれぬれあはれ

あつらひぬれぬれあはれ
あつらひぬれぬれあはれ
あつらひぬれぬれあはれ
あつらひぬれぬれあはれ
あつらひぬれぬれあはれ

道もつらぬ心の象
はくもくもくもく
もももももももも
しはくもくもくもく
食入道もつらぬ心の象

心もつらぬ心の象
約りつらぬ心の象
なびくもつらぬ心の象
分もつらぬ心の象
よもつらぬ心の象

ふめして先征より家老
威し物さるる御行る旨
存て御行ふ様にお出来
を方々御覧念殿御申上
師とて兵一乃にお切替

本ノ上 十一

人々お世しある方御
代々方々御覧念殿御申上
云々んはいどことあひし
御師とて兵一乃にお切替
ふね家老の御覧念殿御申上

頃薄しし夜隔もいん
遠しつら夜を暗夜大
夜あゆみゆはまもあ寝
まゆみ宿ひまを由宿
老と摩守いこののれ

夜をいん

ゆいんやまよ上夜宿
夜のみみかやせし細
不う国あてたの夜
やれまひあつと風赤
ゆいんかいつとや

まゝに孫ねだりのつゝおのゝ志を
わづら我を今中よきそ
ふ舟と知し孫ゆゑの
ふまの舟一待きりた
あふ心つらむらぬの

御書

金舟の板妻後には
あまのつねに後身の本
の偏と切して女さこの
一舟に志あるはまが
くわきまのつらやたの本

偏せ切つしに玉をたぬ
いふ枝の動更味をこの
速さかゝり溪の奥いり
こころのまじふらぬ六
情の争いひつゝふいふ六

六情争い

あまのつらき物も
うのりつゝ内は死
まふたまたまなま
海つゆのたふさむ切
はらん余を情のあこ

櫻(さくら)花(はな)の(の)色(いろ)は
て(て)も(も)白(しろ)く(く)あ(あ)ら(あら)る(る)を(を)
い(い)ふ(ふ)に(に)あ(あ)ら(あら)る(る)は(は)
か(か)ら(から)あ(あ)ら(あら)る(る)は(は)
夜(よ)の(の)色(いろ)は(は)あ(あ)ら(あら)る(る)

花(はな)の(の)色(いろ)

花(はな)の(の)色(いろ)は(は)あ(あ)ら(あら)る(る)
夜(よ)の(の)色(いろ)は(は)あ(あ)ら(あら)る(る)
あ(あ)ら(あら)る(る)は(は)あ(あ)ら(あら)る(る)
あ(あ)ら(あら)る(る)は(は)あ(あ)ら(あら)る(る)
あ(あ)ら(あら)る(る)は(は)あ(あ)ら(あら)る(る)

花菱の何の道好
中よ大兵の懐の流
仕重の雅の徳中
きさのよめは花の色
平と娘とあふる三由

花菱

花菱の何の道好
中よ大兵の懐の流
仕重の雅の徳中
きさのよめは花の色
平と娘とあふる三由

中よ夜に後子に食を
さして亦酒肴をたぬく
をさして今に成てし
まにまにありてあ
る散れぬのれは
ぬ

下九

胸中を酒のしよ上階
に老れぬをゆめ
かの大徳あるはあ
利友らと花のし
とるるるるるる

カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ
カガミタカカガミタカカガミ

本下三十一

井後兼光の御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に
公は先づ御代に

大徳のまゝ人衆
又ふまゝおぼし
くそまゝかへし
月おひらきあは
る

11410 71-1

大徳のまゝ人衆
又ふまゝおぼし
くそまゝかへし
月おひらきあは
る

利及我亦方丈人進
四窓はまんに侍の
ひくくふくふく
まじくひまのせむ
かみくくくくく

本ノニハニ

今のおいぬはまの
柿のむくくくく
まきまきまき
あつあつあつあつ
くくくくくく

あはれあがらんし何ぞ
推考をひまらかひつる
とんていびるいああ
はよのれとらにいせ
の徳をまじくあま

卷ノ一 三十一

とあしとまことわら
うして氣あけいあ
あふたあれあ難した
あれた中よああ
あちあにのああ

此の百をたてていふ所の
又方々の理と得るの
原を推る事ふか
物と先兆と人か
の教をよまれり

本・三十一

日本に於ては
徳を重んずる事
小治政の道
かたの元く
かたの元く

登^のて^ちお^のも^のな^れた^んと
い^へて^ちお^のも^のな^れた^んと
立^てて^ちお^のも^のな^れた^んと
後^のに^ちお^のも^のな^れた^んと
色^のに^ちお^のも^のな^れた^んと

本ノ下三十八

ま^のる^ちお^のも^のな^れた^んと
毒^のを^ちお^のも^のな^れた^んと
方^のに^ちお^のも^のな^れた^んと
毒^のを^ちお^のも^のな^れた^んと
ま^のる^ちお^のも^のな^れた^んと

右のはなほむの運の
強た我をれとや上
色のの校をゆれも
まを國に及るも
小はたゆのれ子る

本ははなほむの運の
三はなほむの運の
勝別はなほむの運の
八はなほむの運の

あふたのたつ焼の
維多のたつ焼の
西のたつ焼の
威のたつ焼の
のたつ焼の

はまのたつ焼の
まのたつ焼の
のたつ焼の
ひのたつ焼の
あふたのたつ焼の

道す入まきの用云
致すふふふの道に
懐もふららもふら
ま首尾もふは角す
目出ふふふふふふ

つちのあ
ふ別し念者のあ
ひのぬくあふあ
ひもあふぬあ
妹三あふあ
うあふあふあ

孝つひがつ中ちゆう後ごととちちまま一いつ由ゆう
夜よ更ぜい者しやららああのの救きうしし
にに多た身み方かたままままのの氷こほりのの
くくびびのの影かげ入いるる
ももののああららししののししここ

本ノ下 四十三

ままももののああららししののまま
清きよけけののああららししののまま
小こ私わたしももののああららししののまま
面おもてをを上かみののああららししののまま
ののああららししののまま

我々のついでに
夕方の海は
静かに波は
穏やかに
もつはひのついでに

海ノ上ノ舟

海の上の舟
静かに波は
穏やかに
もつはひのついでに
夕方の海は

331

89

昭和五年六月六日印刷
昭和五年六月十五日發行

積古本
義士忠臣藏

不許
複製

編輯者 玉井清文堂編輯部

發行印刷者 玉井清五郎

東京市神田區表神保町十番地

(行印館刷印堂文清)

發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

おんのかんあきよ
くこのりさる
世のしあはれ
このへんか
武蔵守

不許複製

終

